

ほとけの混和会だより

令和四年二月

東光院

仏の混和会

第158号

臨済義玄の言葉に

「無位の真人」

と言う教えがあります。私の好きな言葉です。

義玄様は臨済宗の開祖であります。最澄様の言葉「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」に通ずるものがあると思います。爰に紹介させていただきます。



人生は悟りを求めての旅 No.3

この言葉を一言で要約しますと、坊主と言う肩書き、医師と言う肩書き、様々な肩書きにとらわれる事も執着すること無く、自己、本来持っている眞の仏性に目覚めよ。と言う事です。正に上段に記した最澄様の言葉、己を忘れて人々を慈しむ眞の心に目覚める。と言うことかと思えます。

自らの生涯をこの言葉の如く努められた人が、令和元年十二月四日、アフガンの銃弾に倒れた「中村哲医師」かと思えます。

中村医師は、医師と言う肩書きを捨てて、この地球で人間が人間らしく生きる為に。

又人間は自然の恩恵を頂いて生かされて居る。この事実を知らしめる為に、医師の白衣を脱ぎ捨てて、傍目にはみすばらしく見えるかもしれないが私には神々しく映る作業服に着替え、自らつるはしをにぎり、時には建設重機を操縦し、地域の人々に尽くしてこられた。私の最も尊敬するところで

あります。

風習も価値観も違う人を卑下する事も、善悪とか優劣と言う範疇で見る事も無く、利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切り返さない、とても大きな慈愛心。

そして農業を持って、この地球で生きる人々が争いもなく共に生きる環境を築こうとする使命感に生きる姿。とても素晴らしく少しでもまねる事が出来たらと思います。

そこで中村医師の言葉、一昨年にも紹介しましたが、重ねて左記に列記させていただきます。

◎自然と人間との和解が無いと世界の平和はあり得ない。

◎自然の許すもので自分たちが満足する謙虚さや欲望の少なさが求められる。

◎農村の再生こそ、地球の復興に希望が持てる。

◎自然は人を欺かない。驕慢を打ち砕き恩恵をもたらす。

◎人は愛するに足りる、真心は信じるに足りる。

中村さんの意思を受けつぎ、自然と私達、共に感謝の念を捧げて参りたいと存じます。

お坊さんも時には法衣を脱ぎ、鋤を持ち畑を耕し、人々のよりどころと成るよう勤めたいと存じます。

中村医師は白衣を脱いで、人々と共に、生きる事の原点である農業の復興に努めた。

私自身も、僧侶の身に有りながらも黒衣を脱いで自然と共に生きる学びを深めて参りたいと存じます。

鋤を持ち畑を耕し収穫を喜ぶ姿は、僧侶として好ましくないと後ろめたい思いで居ましたが中村医師の生き方に大変大きな励みを頂きました。

荒廃する農地が少しでも守り伝えられるよう、そしてそこが人々のよりどころと成るよう微力ながらも努めて参りたいと存じます。合掌 亮観拝



私はだれですか

森川天台座主猊下が ご遷化

第二五七世天台座主森川宏映猊下（九六）が十一月二二日逝去なされ、本葬が一月十八日執り行われました事を謹んでご報告申し上げます。



和を希求し、世界平和を求め、イタリヤで開かれた「世界宗教者平和への祈りの集い」に出席し世界中の宗教者との親交を深めると共に「博愛と利他の心をもった

森川座主猊下は大正十四年愛知県産まれ。京都大学農学部を卒業後比叡山の僧侶となられました。座主就任会見の際には「私は比叡山の山林保護を志し、農学部を卒業しました。」と語られてるほど山林保護に長年心血を注がれた方であり、ご自身の戦争体験から、諸宗教対話を通して世界平和と相互理解にも貢献されてこられました。

ローマ教皇と握手を交わされる座主猊下（パチカンにて）



「パチカンにて」

と世界中に向けて発信されました。また、パチカンへ赴きローマ教皇フランシスコ聖下との会見も果たされました。この会見は後にローマ教皇が原爆被害地である広島平和記念公園を訪問された際、日本の宗教者を代表して座主猊下がお迎えになられ、共に世界平和を祈られたお姿は大きな話題となりました。近年ではコロナ渦において苦しむ人々の為に北野天満宮にて神職と僧侶が共に疫病収束や人々の安寧を祈る「北野御霊会」を五五〇年ぶりに再興され、そこにご尽力なされたい事は記憶にも新しいかと思えます。

私直説お言葉を交わす事は適いませんでしたが、発信されるお言葉はわかりやすく、自ら実践なさるお姿から多くのお事を学ばせて頂きました。冥福をお祈り申し上げます。



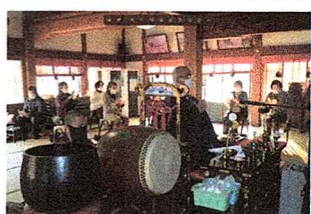
仏教 × SDGs

危機回避の刻限

2030年まであとわずか



中村哲さんは自然と人間との和解と表現してますが、正にその通りかと思えます。自然に対する畏敬の念を忘れ驕慢な人類のおごりによって地球を危機的状況下に追いやった私達の罪は計り知れないものが有ると思われまます。しかし中村さんは農村の再生こそ地球の復興に希望が持てると言っていました。国連の示す生命存続の刻限2030年まであとわずか、真剣に取り組んで参りたいと存じます。



二月三日恒例の節分会のお勤めを致しました。

東光院の節分会は様々な奉仕やご接待と言う形を持って積善の功德を巡らし己の心に潜む三毒の鬼を滅す事を目的に平成十二年より執り行って参りました。お陰様で二十数年、徳を巡らす事の喜びを感じ得る人が次第に増えて、おそば、焼き鳥、ぜんざい、野菜、漬物、ポテトなど様々にご接待をして下さる人も次第に増えて参りました。しかし昨今のコロナウイルスの蔓延により、昨年は中止に追いやられました。しかし本年度はこのご縁が途切れないように、豆まきやご接待は行わずに、お勤めだけ副住職と共に勤めさせて頂きました。当日お参り頂きました皆様には心より感謝申し上げます。合掌

節分会のお勤め